

無気力の自己記入式尺度の現在

—2020年時点での展開—

長 内 優 樹 内 間 望

アブストラクト：

心理学における無気力に関する研究は、スチューデント・アパシーの概念が日本において取り上げられて以降、主に日本で研究が進められてきた稀有な構成概念である。しかし、その実態は、日本独自どころか研究者毎に独自の概念として扱われ研究が進められている。そのような背景であるため、心理尺度もまた、複数存在する。無気力に関する心理尺度のレビューとしては、長内（2012）があるが、それから8年余が過ぎ新たな尺度もみられるようになってきている。本研究では、2020年時点での無気力に関する心理尺度について、それぞれの特徴を列挙することを目的とした。その結果、これまでに存在した尺度を特定の目的のために改変した新規の尺度が1つ存在することが明らかになった。また、尺度の使用状況についてもレビューを行った。

キーワード：無気力、自己記入式、心理尺度

1. 問題と目的

心理学における無気力に関する研究は、スチューデント・アパシーの概念が日本において取り上げられて以降、主に日本で研究が進められてきた稀有な構成概念である。ただし、日本発祥の概念というわけではなく、Walters（1961）によりアメリカの学生の症例に対してスチューデント・アパシーと命名したことに端を発し、その後、日本において独自の発展を遂げてきた（長内，2010）。ちなみに、英語圏の無気力（apathy）の研究は、認知症（dementia）の症状としてのそれに関するものが多い。そのため、無気力はその英訳にする定訳がなく、apathyにはじまり、lethargy（例えば、狩野・津川，2011）、helplessness（例えば、牧，2019）と研究者に

より異なる語を充てる事態になっている。そのような事態のためか、実証的な研究を行うことなく無気力は軽度な抑うつ（depression）状態と同義であるとみなす研究も存在するなど（例えば、桜井，1995）、各研究者により独自の定義が用いられ、あろうことか研究者毎に先行研究として引用する論文に偏りがあるなど（例えば、近年の出版された無気力という語をタイトルに含む論文をみても、大西，2016には、下坂，2001、高山，2006、長内，2011は引用されているが、牧，2019には、大西，2016さえ引用されていない。双方ともに、同じ学会の同じ機関誌であるのにも関わらず、である）、日本独自どころか研究者毎に独自の概念として研究が進められている。

しかし、「やる気がでない」という心的状態は、一般に多くの人が脱したいと考える

心理学的支援が必要な状態であり（例えば、Halvorson, H., 2019など、やる気を出す方法について書かれた書籍は、未だに新刊が出版されている）、研究の発展が望まれているのは事実であろう。そのためか、無気力についての心理学的研究は近年も発表され続けている（例えば、牧, 2019）。無気力という構成概念にコンセンサスが得られていない現状においては、生理指標などの客観的基準は用いることができず、心理尺度を用いた質問紙調査研究が中心となっている。研究者毎に独自の研究が行われ続けている現状においては、心理尺度もまた複数存在する。無気力に関する心理尺度のレビューとしては、長内(2012)があるが、それから8年余が過ぎ新たな尺度もみられるようになってきている（例えば、大西, 2016）。そこで本研究では、2020年時点での無気力に関する自己記入式（評定式）の心理尺度について、それぞれの特徴を列挙することを目的とした¹²。

2. 無気力の自己記入式尺度の概要

Table 1に各無気力の自己記入式尺度の信頼性と妥当性について示した。

1) アパシー傾向測定尺度（鉄島, 1993）

鉄島（1993）による31項目6段階評定の尺度である。因子構造は、「授業からの退去」、「学業からの退去」、「学生生活からの退去」の3因子である。一般大学生のアパシー傾向を実証的に研究するために、無気力を「精神病の無気力と異なり、心理的原因で主として学生の本業である学問に対して意欲の減退を示すこと」との定義に基づき作成されている。作成にあたっては、上地（1981）などを参考に項目を選定したとしている。信頼性は折半法と α 係数により、妥当性は授業への出席数を指標に検証されている（Table 1）。

2) 意欲低下領域尺度（下山, 1995a）

下山（1995a）による15項目4段階評定の尺度である。因子構造は、「学業意欲低下」、「授業意欲低下」、「大学意欲低下」の3因子である。一般大学生の生活領域ごとの意欲低下を測定するための尺度として作成され、作成にあたっては鉄島（1993）の項目を参考にしたとしている。尺度名については、「本研究の目的が一般学生の意欲低下状態の評価であり、スチューデント・アパシーとの連続性を前提としていないので、アパシーという語を直接用いず、意欲低下領域尺度とした」としている。信頼性は下位尺度ごとの α 係数で検証され、妥当性は本尺度の下位尺度の内容が鉄島（1993）のアパシー傾向測定尺度の下位尺度の内容と一致していることから、本尺度は鉄島（1993）の簡易版であり、鉄島（1993）によってアパシー傾向測定尺度の妥当性は確かめられているので、本尺度はそれに準じた妥当性をもつことが推測される、としている（Table 1）。

3) アパシー心理性格尺度（下山, 1995a）

下山（1995a）による20項目4段階評定の尺度である。因子構造は、「張りのなさ」、「自分のなさ」、「味気なさ」、「適応強迫」の4因子である。下山は、スチューデント・アパシーを心理的障害（病理）として捉えようとした。そして、心理的障害としてのスチューデント・アパシーを測定する尺度として本尺度を、笠原（1984, 1988）、山田（1987）、土川（1990）の研究をもとに作成した。信頼性は、下位尺度ごとの α 係数、妥当性は病理としてのスチューデント・アパシーに関する先行研究と一致した内容を備えているので、内容的妥当性がある、としている（Table 1）。

4) 無気力感尺度（笠井他, 1995）

笠井・村松・保坂・三浦（1995）による尺度である。小学生版は15項目4段階評定（笠井他, 1995, p.432）³、中学生版は15項目4段

Table 1 無気力の自己記入式尺度の信頼性と妥当性

尺度名	アバシー傾向測定 尺度	意欲低下領域 尺度	アバシー心理性格尺度	無気力感尺度:小学生版	無気力感尺度:中学生版	アバシー項目	無気力傾向尺度	無気力感尺度	無気力尺度	MSPS	無気力状態測定 尺度	学業領域固有の無気 力状態測定尺度
信頼性												
・内的整合性	全体	下位尺度ごと	下位尺度ごと	下位尺度ごと	下位尺度ごと		下位尺度ごと	下位尺度ごと	下位尺度ごと	未検討	全体	下位尺度ごと
α係数	.877	「学業意欲低下」.73	「振りのなさ」.70	「学校不適応感」.64	「意欲減退・身体的不快感」.73		「アンヘドニア」.89	「自己不明瞭」.84	「快感情の欠如」.87		.83	「努力回避」.88
	(大学生 N=381)	「授業意欲低下」.73	「自分のなさ」.70	「充実感・将来の展望の欠如」.56	「充実感・将来の展望の欠如」.64		「強迫的な完璧主義」.80	「他者不信・不満足」.76	「身体的不調」.72		下位尺度ごと	「葛藤」.81
		「大学意欲低下」.77	「味気なさ」.69	「身体的不快感」.68	「積極的学習態度の欠如」.58		「回避・消極」.70	「疲労感」.82	「目標喪失」.83		「活動的」.81	「達成非重視」.84
	(男子大学生 N=479名)	「適応強迫」.51	「消極的友人関係」.59	「消極的友人関係」.59	「消極的友人関係」.59		(日本と韓国の大学生 N=736)	(明記されていないが、α係数算出時は恐らく中学生・高校生・大学生を合計しているため N=949)	「行動停滞」.75	(大学生 N=446)	「先延ばし」.79	(大学生 N=284)
		(男子大学生 N=479名)	(男子大学生 N=479名)	(小学生 N=1721)	(中学生 N=1396)						(大学生 N=403)	
折半法	r	0.877										
折半法 Guttman						男性: .91, 女性: .88 (男性大学生: N=786)						
・安定性 再検査法	r	0.87										
		(大学生 N=153)										
妥当性	授業への出席率を指標に検討されたため、(r=.516)。	鉄島(1993)の橋易版であるため、妥当性は鉄島(1993)に準じるとしている。	各下位尺度に対し複数の先行研究の内容が相当するところから、内容的妥当性を備えているとしている。	「日常生活の状況」についての複数の指標との関連をもとに検討している。	「日常生活の状況」についての複数の指標との関連をもとに検討している。	項目の選択段階にて、心理学専攻の教員の検討をうけて妥当なもののみとした、としている。	記述なし	「中高生版無気力感尺度(笠井・三浦,1997)」「アバシー傾向測定尺度(鉄島,1993)」「自我同一性尺度(宮下,1987)」「外的統制感尺度(鎌原,1982)」との平行検査が行われ、妥当性は充分とされている。	記述なし	下坂(2001a)によって作成された無気力感尺度との相関係数をもとめることにより検討された(r=.57)。また、同尺度の各下位尺度の因子得点との相関係数は、「自己不明瞭」がr=.52、「疲労感」がr=.54、「他者不信・不満足」がr=.41であった。(大学生 N=150)	未検討	すべての下位尺度と学業への取り組みの実際に関する項目の間に有意な負の相関が得られたため、妥当性が示されたとしている。
出典	鉄島(1993)	下山(1995a)	下山(1995a)	笠井他(1995)	笠井他(1995)	宗像(1997)	李(2000)	下坂(2001)	高山(2006)	長内(2009)	長内(2011)	大西(2016)

注) 尺度作成時の情報をもとに作表している。後続する研究において、追加の検討が行われている尺度もある。

階評定である(笠井他, 1995, p.430)⁴。無気力を「精神病の無気力とは異なり、心理的な原因で、日常生活のさまざまな場面において意欲の減退を示す状態像」と定義し、一般の小学生および中学生を対象に、日常生活のさまざまな場面における顕在的・潜在的な無気力感の様態を明らかにすることを目的に作成された。信頼性は下位尺度ごとに α 係数⁵、妥当性の検討については明記されていないが、日常生活の状況(成績の自己評価、起床時間、就寝時間、学習時間、塾に通っているか否か、仲の良いグループの有無、親友の有無など)との関係が検討されている(Table 1)。しかし、最終的に、信頼性・妥当性ともに充分とは言いがたいと結論付けられている(笠井他, 199, p.434)。その後、中学生版については、笠井・三浦(1997)によって再度研究が行われ、因子構造が作成時(笠井他, 1995)と同一であったことが報告されており、牧・関口・野村・根建(2007)においては中学生の経験する場面を広く網羅しているとして使用されている。

5) アパシー項目(宗像, 1997)

宗像(1997)による男性版は24項目5段階評定、女性版は32項目5段階評定の項目群である。笠原(1973, 1977, 1978)、石井・笠原(1981)などの先行研究をもとに、アパシーを生きがいが、目標、進路の喪失、情意の減退、自己否定、優劣勝敗への過敏さ、受動性、交友関係の貧困の6つの特徴をもつものと定義している。男性版の信頼性はGuttman係数で.91、女性版は.88であったとしている。また、項目の選定の適切さは、心理学専攻の教員の検討をうけて妥当なものとした、としている。これは内容的妥当性についての記述といえる。

6) 無気力傾向尺度(李, 2000)

李(2000)による24項目4段階評定の尺度である。因子構造は、「アンヘドニア」、「強

迫的な完璧主義」、「回避・消極」の3因子である。無気力傾向の中心概念をアンヘドニア、回避、受動、消極性、強迫的完璧性に焦点をあて尺度作成の際には、下山(1995a)、下山(1995b)、竹内(1995)、笠原(1977)などを参考にしたとしている。信頼性は下位尺度ごとに α 係数、妥当性については記述が見当たらない(Table 1)。また、李(2001)、李(2004)にてこの尺度の項目は改めて加減されている。

7) 無気力感尺度(下坂, 2001)

下坂(2001)による19項目6段階評定の尺度である。因子構造は、「自己不明瞭」、「他者不信」、「疲労感」の3因子である。無気力を「日常生活全般で、自分をやる気がないと感じる」と定義している。また、尺度を作成するための項目の選定においては、予備調査として「私がやる気がないのは～」で始まる刺激文を提示する文章完成法を用い、一般大学生を対象に無気力感に関する記述を収集したボトムアップ型の過程を経ている。信頼性は、下位尺度別に α 係数、妥当性は、笠井・三浦(1997)が作成した無気力感尺度の数項目、アパシー傾向測定尺度(鉄島, 1993)、自我同一性尺度(宮下, 1987)、外的統制感尺度(鎌原・桶口・清水, 1982)を用いて、併存的妥当性(基準関連妥当性)が検討されている(Table 1)。また、中・高・大学のすべての教育段階において使用することが可能であるとされており、さらに下坂(2006)では有職社会人を対象に用いられている。

8) 無気力尺度(高山, 2006)

高山(2006)による30項目5段階評定の尺度である。因子構造は、「快感情の欠如」「身体的不調」「目標喪失」「行動停滞」の4因子である。無気力を「価値や目標の喪失に基づく意欲の低下(p.46)」として捉え、一般大学生の無気力の内容を研究者側から理論的に設定するのではなく、大学生自身が捉えてい

る無気力を自由記述形式の調査によって質的に調べることにより、ボトムアップ式に開発した、としている。信頼性は下位尺度ごとに α 係数によって確認されているが、妥当性に関する記述はみあたらない (Table 1)。

9) Method of measurement for Subjective strength of Perceived apathy by Single item : MSPS (長内,2009)

長内 (2009) は、Visual Analogue Scale (以下、VAS) を使用して、無気力の主観的強度を単一項目で測定する方法を提案した。VASは主観的な気分の強度を評定する方法であること、また、極めて簡易であるため回答意欲の低い調査対象者の回答を得やすいことが予想されるため、知覚された無気力の主観的な強度を測定する際にVASを用いることは適切であると考えたが、10cm幅の正規のVASは、質問紙調査研究では不適切な場合もあるとし、10cm幅に拘らない、としている。そして、MSPSの妥当性を下坂 (2001) によって作成された無気力感尺度との相関係数をもとめることによって検討した (Table 1)。しかし、妥当性は検討されていないという課題に加えて、上述したとおり10cm幅に拘らないとしているが、調査では7件法の尺度に混ぜる形で実施しているため方法論そのものに問題があるといえる。

10) 無気力状態測定尺度 (長内, 2011)

長内 (2011) による15項目6段階評定の尺度である。因子構造は、「非活動的」、「不本意」、「先延ばし」の3因子である。個人が自己の意欲や精神的なエネルギーの低下を主観的に認識している状態を「知覚された無気力 (perceived apathy)」と定義し、領域全般的な無気力と領域固有的な無気力とに大別している。本尺度は、前者の測定を目指したものとされている。また、将来的に研究および臨床場面への応用を考慮し、項目数が少なく、なおかつ下位尺度が同じ項目数で構成され

た簡易な尺度を作成することを目指した、としている。英称を Perceived Apathy State Scale in Academics: PASSとしている。結果として5項目ずつの尺度となっている。信頼性は下位尺度ごとに α 係数、妥当性については未検討としている (Table 1)。ただし、その後の研究において、下坂 (2001) との相関から併存的妥当性を有すること示され (長内, 2013)、信頼性もまた再検査信頼性の側面から追加の検証 (長内, 2015) がなされるなど、検討が続けられている。

11) 学業領域固有の無気力状態測定尺度 (大西, 2016)

大西 (2016) による15項目5段階評定の尺度である。因子構造は、「労力回避」、「葛藤」、「達成非重視」の3因子である。一般的な学生が学業領域において無気力行動を知覚している際、同時に知覚していると考えられる無気力感を測定するための学業領域固有の無気力状態測定尺度 (長内 (2011) に倣い、Perceived Apathy State Scale in Academics: PASS-Aと命名する) を作成したとしている。信頼性は下位尺度ごとに α 係数、妥当性は下位尺度と学業への取り組みの実際に関する項目の間に有意な負の相関が得られたため、妥当性が示された、としている。

また、本研究で列挙した尺度について、国内で発行された学術論文全文を読むことのできる、日本最大級の総合電子ジャーナルプラットフォームであるとされるJ-STAGE (科学技術振興機構, n.d.) を使用し、使用状況をレビューした。その結果を Appendix 1 に示す。

3. おわりに

本研究においては、2020年時点での無気力に関する自己記入式 (評定式) の心理尺度について、それぞれの特徴を列挙することを目的とした。そのため、尺度の比較を意図的に

避けた。本研究に列挙した尺度は、作成の背景や定義、測定対象としている無気力の違いにより分類が可能であることが予想される。

今後、そのような比較や分類を行うことにより、当該領域の一層の発展に寄与することができるであろう。

Appendix 1

尺度名	原著論文	尺度使用論文一覧			
		論文名	著者名・年号	雑誌名・巻(号)	ページ数
アパシー傾向測定尺度	鉄島(1993)	大学生のアパシー傾向の男女別検討	宗像剛(1997)	心理学研究・67(6)	458-463
		青年期の各学校段階における無気力感の検討	下坂剛(2001)	教育心理学研究・49(3)	305-313
		青年期における一般的統制感と時間的展望—アパシー傾向との関連性—	杉山成・神田信彦(1996)	教育心理学研究・44(4)	418-424
意欲低下領域尺度	下山(1995)	大学生における学業と職業の接続と大学適応：自己不一致理論の観点から	半澤礼之・坂井敬子(2005)	進路指導研究・23(2)	1-9
		大学生における「学業に対するリアリティショック」尺度の作成	半澤礼之(2007)	キャリア教育研究・25(1)	15-24
		大学生における無気力の分類の試み—スチューデント・アパシーと抑うつとの観点から—	狩野武道・津川律子(2008)	こころの健康・23(2)	2-10
		大学生における学校生活満足度と学校生活意欲との関連	武蔵由佳・河村茂雄(2016)	教育カウンセリング研究・7(1)	35-44
		学業領域固有の知覚された無気力の探索的研究	大西恭子(2016)	教育心理学・64(3)	340-351
アパシー心理性格尺度	下山(1995)	大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達、家族機能の関連性	白石尚大・岡本祐子(2006)	青年心理学研究・17巻	1-13
		大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連	山田裕子(2011)	青年心理学研究・23(1)	1-18
		男子大学生のアパシー傾向とCloningerの気質・性格の7次元モデル	山形伸二・栗野真男(2003)	パーソナリティ研究・12(1)	30-31
		日本の大学生の職業未決定類型化に関する一考察：アパシー心性及び余暇重視との関連から	安藤聡一朗(2011)	青年心理学研究・23(2)	175-184
		大学生における居場所感とアパシー傾向がネット依存傾向にもたらす影響	川原正人(2020)	東京未来大学研究紀要・14巻	37-44
無気力感尺度	笠井(1995)	学業領域固有の知覚された無気力の探索的研究	大西恭子(2016)	教育心理学・64(3)	340-351
		男子大学生の無気力の研究	下山晴彦(1995)	教育心理学研究・43(2)	145-155
		中学生における無気力感の予防・対処要因—時間的・性別要因を入れた検討—	牧柳子(2011)	カウンセリング研究・44(2)	136-147
アパシー項目	宗像(1997)	保護者との情動交流が小学生の無気力感に与える影響—構造方程式モデルによる分析—	牧柳子(2019)	教育心理学研究・67(4)	223-235
		青年期の各学校段階における無気力感の検討	下坂剛(2001)	教育心理学研究・49(3)	305-313
		児童・生徒の未来展望尺度の開発及び未来展望と学校適応感との関連	陳晶品・茂呂雄二(2016)	発達心理学研究・27(2)	115-124
無気力傾向尺度	李(2000)	韓国の高校生における無気力傾向と進学動機の不明確性との関係	李相蘭(2001)	性格心理学研究・9(2)	102-115
無気力感尺度	下坂(2001)	日・韓高校生における無気力傾向に関する比較研究：進路発達との関連に注目して	李相蘭(2004)	発達心理学研究・15(3)	302-312
		ストレスラーと実行されたソーシャルサポートが無気力に与える影響—大学生における縦断研究—	本間里美・松田英子(2012)	ストレス科学研究・27巻	64-70
無気力尺度	高山(2006)	高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係	竹村明子・前原武子・小林稔(2007)	教育心理学研究・55(1)	1-10
Method of measurement for Subjective strength of Perceived apathy by Single item (MSPS)					
無気力状態測定尺度	長内(2011)	なし			
学業領域固有の無気力状態測定尺度	大西(2016)	なし			

引用文献

- Halvorson, H. (2019). The 8 motivational challenges : a short guide to lighting a fire under anyone. Discover21.
(ハイディ・グラント・ハルバーソン, 林田レジリ浩文 (翻訳) やる気が上がる8つのスイッチ ディスカヴァー・トゥエンティワン)
- 石井完一郎・笠原 嘉 (1981). スチューデント・アパシー 現代のエスプリ No.168 至文堂.
- 科学技術振興機構 (n.d.). J-STAGE <https://www.jstage.jst.go.jp/> (2020年10月29日)
- 狩野武道・津川律子 (2011). 大学生における無気力の分類とその特徴 —スチューデント・アパシーと抑うつとの視点から— 教育心理学研究, **59**, 168-178.
- 鎌原雅彦・桶口一辰・清水直治 (1982). Locus of Control尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, **30**, 302-307.
- 上地安昭 (1981). 学生の意欲減退 石井完一郎 (編) 現代のエスプリ No.168, pp.188-200.
- 笠原 嘉 (1973). 現代の神経症—特に神経性 apathy (仮称) について 臨床精神医学, **2**, 153-162.
- 笠原 嘉 (1977). 青年期—精神病理学から— 中公新書.
- 笠原 嘉 (1978). 退却神経症 withdrawal neurosis という新カテゴリーの提唱 中井久夫・山中康裕 (編) 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版, pp.287-319.
- 笠原 嘉 (1984). アパシー・シンドローム—高学歴社会の青年心理— 岩波書店.
- 笠原 嘉 (1988). 退却神経症—無気力・無関心・無快樂の克服— 講談社.
- 笠井孝久・村松健司・保坂 亨・三浦香苗 (1995). 小学生・中学生の無気力感とその関連要因 教育心理学研究, **43** (4), 424-435.
- 笠井孝久・三浦香苗 (1997). 中学生の無気力感—学校忌避感情・学校成績との関連— 千葉大学教育実践研究, **43**, 424-435.
- 牧 郁子 (2019). 保護者との情動交流が小学生の無気力感に与える影響—構造方程式モデルによる分析— 教育心理学研究, **67**, 223-235.
- 牧 郁子・関口由香・野村 忍・根建金男 (2007). 思考の偏りが中学生の無気力感に与える影響—無気力感モデルの検討を通して— カウンセリング研究, **40**, 244-256.
- 宮下一博 (1987). Rasmussenの自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, **35**, 253-258.
- 宗像 剛 (1997). 大学生のアパシー傾向の男女別検討 心理学研究, **67** (6), 458-463.
- 大西恭子 (2016). 学業領域固有の知覚された無気力の探索的研究 教育心理学研究, **64** (3), 340-351.
- 長内優樹 (2009). 知覚された無気力の主観的強度の測定法に関する研究 応用心理学研究, **35** (1), 23-24.
- 長内優樹 (2010). 無気力に関する心理学的研究の展望—健常な個人が日常的に知覚する無気力を研究するために— 『応用社会学研究 東京国際大学大学院社会学研究科』 **20**, 83-94.
- 長内優樹 (2011). 無気力状態測定尺度の作成の試み 東京国際大学大学院社会学研究科 応用社会学研究, **21**, 47-53.
- 長内優樹 (2012). 無気力の自己記入式質問紙 応用社会学研究 東京国際大学大学院社会学研究科, **22**, 85-91.
- 長内優樹 (2013). 自己記入式無気力尺度の比較の試み 日本応用心理学会第80回記念大会発表論文集.
- 長内優樹 (2015). 無気力状態測定尺度の再

- 検査信頼性—大学生を対象とした縦断調査による検証—モチベーション研究, 4, 22-25.
- 李 相蘭 (2000). 青年期無気力傾向に関する比較研究—日・韓の大学生を対象に—東京大学大学院教育学研究科紀要, 40, 139-150.
- 李 相蘭 (2001). 韓国の高校生における無気力傾向と進学動機の不明確性との関係性—性格心理学研究, 9 (2), 102-115.
- 李 相蘭 (2004). 日・韓高校生における無気力傾向に関する比較研究：進路発達との関連に注目して—発達心理学研究, 15 (3), 302-312.
- 桜井茂男 (1995). 「無気力」の教育社会心理学—無気力が発生するメカニズムを探る—風間書房
- 下坂 剛 (2001). 青年期の各学校段階における無気力感の検討—教育心理学研究, 49, 305-313.
- 下坂 剛 (2002). 無気力研究の心理学的展望—人間科学研究 (神戸大学発達科学部人間科学研究センター), 9 (2), 87-96.
- 下坂 剛 (2006). 社会人における自己評価と他者評価予想のずれと無気力感の関係—中九州短期大学論叢, 28 (1), 3-15.
- 下山晴彦 (1995a). 男子学生の無気力の研究—教育心理学研究, 43, 145-155.
- 下山晴彦 (1995b). スチューデント・アパシーの下位分類の研究—東京大学大学院教育学研究科紀要, 35, 159-185.
- 高山草二 (2006). 無気力と無力感—動機の期待×価値理論からの分析—島根大学教育学部紀要, 39, 45-53.
- 竹内知夫 (1995). 心の病—星和書店.
- 鉄島清毅 (1993). 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討—教育心理学研究, 41, 200-208.
- 土川隆史 (1990). メンタルヘルス・シリーズ—スチューデント・アパシー—同朋舎.
- Walters, P.A.J. (1961). Student Apathy

Blaine B. Jr. & McArthur C.C. (ed) *Emotional Problem of the Student*, Appleton-Century-Crofts.

山田和夫 (1987). スチューデント・アパシーの基本病理—長期縦断的観察の60例から—平井富雄 (監修) 現代人の心理と病理—サイエンス社, pp.350-373.

脚注

- 1) 本研究は、長内優樹 (2012). 無気力の自己記入式質問紙 『応用社会学研究—東京国際大学大学院社会学研究科』, 22, 85-91. に修正と加筆をおこなったものである。
- 2) 本研究の一部は、日本心理臨床学会第39回大会にて発表が予定されている。
- 3) 笠井他 (1995) では、尺度の作成にあたり、複数の調査および分析を実施している。本論では、笠井他 (1995) の p.432 の「TABLE 5」が小学生向けの最終版であると解釈した。
- 4) 笠井他 (1995) では、尺度の作成にあたり、複数の調査および分析を施している。本研究では、笠井他 (1995) の p.430 の「TABLE 3」が中学生向けの最終版であると解釈した。
- 5) 表1の笠井他 (1995) の尺度に該当する箇所は、笠井他 (1995) の p.432 の「TABLE 5」および p.430 の「TABLE 3」を尺度の最終版と解釈して引用し作表した。

利益相反

本研究の実施にあたり、開示すべき利益相反はありません。